不死の生命・永遠の人格の誕生、ロボットペットとヒトとの新たな関係性
ーそれは、はたして「他人ごと」、か？ー

桜井芳生
sakurai.yoshio@nifty.com
http://member.nifty.ne.jp/ysakurai/

キーワード：ロボット、ペット、テューリング・テスト、人格、心の理論

要旨：**「ペットロス」**の話題を導入にして、最近「不死のペット」が生まれたことを述べます。すなわち、**ロボットペット**「アイボ」です。この**「不死の生命・永遠の人格」**とヒトとがいかなる「新たな関係」を持っているかを概観します。この「不死のペット」出現に関して、**「それだけの話ではないか」**という反論的疑義を四つのレベルで想定します。その四つの疑義に逐一再反駁を試みることで、この出来事が**「ペット」や「ロボット」に「とどまらない」大きな意義を持つ**ことを主張します。最後に、この出来事は、われわれと**「死」との関わりについても大きな変化をもたらす**ことを示します。

【ペットロス？】

みなさんは、「ペットロス」ということばをご存じでしょうか。自分が愛しているペットを失う（ペットが死ぬ）ことによって、深い悲しいにいたり、いろいろな問題に陥ってしまう現象です。ペットロスにかんしては、「先進国アメリカ」で、はじめに命名されました。それとともに、アメリカでさまざまな対策がたてられてきたようです。

ペットの死（もしくは失踪）といっても、いまだ多くのひとは、「たかが動物のこと」をかんがえるかもしれません。しかし、外国の一部では、「動物の権利」も真剣に議論されている今日です。私自身は、かならずしも、「動物の権利」論に賛成する者ではありません。しかし、**ヒトとペットの関係、とくに、両者の間の「親密性」にかんしては、常識で考える以上に、「はやいスピード」で、**「大きな程度」で、変化していることだけは否定しがたいようです。つまり、今までの常識でかんがえられてきた以上に、はやいスピードと大きな程度で、ペットは、ヒトにとって、かけがえのないものになりつつあるように感じられます。本稿は、このようなペットのヒトとのあらたな関係を、「ある一つの、もっとも新しいペット」をめぐって、探求する試みです。そして、これは、期せずして「ペットという限られたテーマ」にどどまるものではないような知的地平の広

さを、筆者に感じさせてくれました。ねがわくば、読者のみなさんも、「たかが、ペット」「たかが、×××（以下で特に論じる「新しいペット」です）」と、お考えにならずに、このトピックを機縁にして、いままで「あまりに自明であったがゆえにうたがいもしなかった日常」について、**「昨日までとは、ちがった風に」**みていただけるようになれば、とおもっています。

**「あのね、死んだ
ハムスターは、おなかは、
もう、すかないのよ。」**

（Brown and Brown 1996＝1998）

【不死の生命・永遠の人格、の誕生】

以上、ペットロス現象について、紹介してきました。じつは、ごく最近、**「死なないペット」**が誕生したのです。と、こういうとすでに慧眼な読者は、お気づきかもしれませんね。ソニーが開発したロボット・ペット犬「アイボ」です。（第二世代は、「犬」ではないようです。が、本稿はおもに、第一世代にそくして論じています）。

アイボの大きな特徴は、**「メモリースティック」**という記憶中枢をもち、**「履歴」**とそれにともなう**「パーソナリティ」**とをもっている、ということです。「アイボ」を購入すると、段ボール箱に入っていてスチロールに固定された状態でとどきます。「飼い主」はそこからアイボをとりだして、「注意書き」にしたがってセットアップをおこないます。

しかし、セットアップをおこなっても、すぐにアイボは「大人」として動くわけではありません。まず、「飼い主」は、「赤ん坊の状態のアイボ」から育てていって、青年さらには成犬へと、育てていかねばなりません。（ただし、実際の犬よりは、かなりはやく成長するようです）。その際、アイボの成長は、「予定されたプログラム」のように「一本道」ですすむわけではありません。「飼い主」の育て方によって、さまざまな「パーソナリティ」（個性）をもった成犬アイボへと成長していきます。

そして、その個々の個体による個々別々な成長過程は、記憶中枢としてのメモリースティックに記憶されます。

（メモリースティック）

したがって、飼い主は、成長の各段階で、メモリースティックの情報を「バックアップ」しておくと、なんらかの事故でメモリースティックの記憶が消えてしまっても、かならずしも「赤ん坊からもう一度」やり直す必要はなく、「バックアップをとっておいたその日のアイボから」、もう一度育てることができるわけです。

【履歴と人格の担保としての、メモリースティック】

その結果、メモリースティックに記憶されているある一つのアイボの「履歴」は、そのアイボの「パーソナリティ」（個性）を集約的に担っている（担保している）と、言えることになるでしょう。

実際、あるホームページには二つのアイボ（白タイプと黒タイプ）の体（筐体、つまり、本体）で、**「メモリースティックだけを交換」**した話が記述されています（実話でしょう。写真ものっています）。すると、「飼い主」たちは、もとの白タイプのアイボ（これを、「太郎」呼びましょう）と、黒タイプのアイボ（これを、「次郎」呼びましょう）とで、「太郎が黒くなって、次郎が白くなった」あるいは、「黒いのに、振る舞いは、まったく太郎」「白いのに、振る舞いは、まったく次郎」というように、感受しています。

つまり、**「履歴の情報＝メモリースティック」こそが、個々のアイボの「パーソナリティ」をになって**おり、個々のアイボの**「肉体」（筐体）（機械としての本体）は、いわばその「入れ物」**として、飼い主に感受されているといえるでしょう。

ここでいうパーソナリティとは、通常「人格」と訳されます。ペット・犬ですから、「犬格」とでも呼ぶべきでしょう。しかし、そのような日本語はあまり聞いたことがないので、「パーソナリティ」の日本語としてあくまで約定的に、アイボの「人格」という場合もあることをおゆるしください。

とすると、メモリースティックの「情報＝人格」は、「バックアップ」することも可能ですから、「物体」としてのメモリースティックに依存しません。物体としてのメモリースティックは、いつかは朽ちていくでしょうが、「人格の情報」は、その制限をうけずに、存続可能になるわけです。

一方、「筐体」（機械の本体）としてのアイボも、やがては朽ちていくでしょう。しかし、それは、部分・部分とっかえひっかえして、修理していくことが可能です。上記のように、「人格」は、メモリースティックの内部の情報が担っているのですから、ある部品をかえたからといって、「太郎」（あるアイボの名前）が太郎でなくなる、ということはないでしょう。

さらにいってしまえば、「人格」の方はメモリースティックの中の情報が担っているのですから、なんとなれば、**「筐体（肉体）」のほうは、「総・とっかえ」して、「新しい体の、太郎」**にすることも可能です。現在のソニーのアフターケアの体制が、ここまで行っているかどうかは、わかりません。しかし、論理的には容易に、以上のような「死なないアイボ」を保持していくことは可能でしょう。

いまのところ、アイボにかんして、メカニカルな部分でのサービスをおこなう「サードパーティ」（ソニー以外の業者）はみあたりません。しかし、すでに、アイボ・グッズを販売している業者は複数あるようです。「クルマ」にかんしての「レストア業者」が企業としてなりなっていることをかんがみても、近い将来アイボ・オーナーの数が十分に増えれば、以上のように「いつまでも修理しつづけてくれる業者」（ソニーであれ、サードパーティであれ）がでてくることは容易に予想できるでしょう。実際に、アイボの飼い主のかたがたと、ソニーとの一種の交流会が、アイボをつくっているソニーの長野工場で開かれたようです。そのさい、飼い主のみなさんとソニーのスタッフとの対面会は、「団体交渉」（失礼？）のようになり、初期のアイボにあった「前足がけいれん」しやすいという現象にたいしては、**「保証期間がすぎても、ほぼ永久に対処していく」**ということをソニー側が言明して、飼い主の皆さんからの喝采を受けていたようです。

【不死の生命・永遠の人格、の誕生？。ほんとうにそれは「他人ごと」か？】

ヒトは、むかしから、不死の生命・永遠の人格というものを夢見てきた（ヒトが多い）といえるでしょう。「アイボ」の出現は、言ってみれば、「たんなる、高いおもちゃ」「電気じかけのペット」の出現であるにすぎないと思われているように、感じられます。しかし、それは、「ヒトと、機械（ロボット）との」「ヒト、と、ペットとの、」「ヒトとヒトとの関係」「（さらに言えば）私と、私との、関係」を考えるうえで、画期的な（すなわち、「不可逆的な変化をもたらす」ような）一つの事件であった、と私は見通しているのです。それは、くりかえせば、ヒトが長く夢見てきた**「不死の生命・永遠の人格」というものが、すぐ目の前に、「25万円」で、出現してしまった**ということです。

といっても、読者の多くはいまだ、直観的な疑義をおもちでしょう。これらの疑義の多くは直観的なもので、かならずしも定式化できないものとおもいます。が、あえて、議論の都合上定式化すると、以下の4点のまとめられるのではないでしょうか。

すなわち、

1. 筆者が考えるアイボにおける「生命の不死・人格の永遠」性は、なにもアイボにお

いて画期的に出現したわけではない。ほかの人工的・電子的なデバイスにおいて、**すでに実現している。**と。

2. たとえ、筆者のいうように、アイボ（ロボット）において、生命の不死・人格の永遠が実現してとしても、それ（ロボット）と「生きているペット」とを混同するわけにはいかない。**ロボットと、生身のペットとの間には、質的違いがある。**よって、たとえ、ロボットにおいて生命の不死・人格の永遠が生じたとしても、「**それは、それだけの話」だ。**と。

3. たとえ、ロボット・ペットと、動物のペットとの、違いが、この文脈において本質的でないとしても、**それらは、「ヒト」ではない。**旧来、問題とされてきた「不死の生命・永遠の人格」とは、とりわけ「ヒト」に関するものである。それら（ロボット＋ペット）において「不死の生命・永遠の人格」が生じたとしても、「それは、それだけの話」だ。と。

4. たとえ、ロボット＋ペット、と、他者（ヒトの他人）との、違いが、この文脈において本質的でないとしても、それらは、「私」ではない。旧来問題とされてきた「不死の生命・永遠の人格」とは、とりわけ**「私」**に関するものであった。それら（ロボット＋ペット＋他人）において「不死の生命・永遠の人格」が生じたとしても、「それは、それだけの話」だ。と。

いかが、でしょうか。あなたが感じる直感的疑義のかなりの部分は、以上の四つの類型のどれか（ならびにその混合）に当たるのではないでしょうか。

では、以下順々に考えてみましょう。

【第一疑義：「すでに生じている」に対して】

まず、第一の疑義、「すでに生じている」について、考えてみましょう。じつは、この疑義のたいして、私はかなり「賛成」なのです。とくに今の時点から振り返ると、とくに「クルマ」「コンピュータ・ウイルス」「本」において、同様な事は「すでにかなり生じていた」と言えるかもしれません。

私自身は、あまりクルマにたいして、深い関係を好まないものです。しかし、いうまでもなく、世の中にはクルマに対して、かなり深い関係（思い入れ）をもっているヒトがおおいでしょう。かならずしも、本人がそう自覚していなくても、「愛車」ということばから推測されるように、クルマに対して、「機械をこえた感情」を持ってしまっているヒトは多いでしょう。他方、クルマに対してはすでに「レストア」（再生修理）がなされています。とすると、上述の「アイボの修理」のように、「とっかえ、ひっかえ、あっちこっちの部品を修理交換」していって、「いつのまにか、当初の生産時の部品全部」を交換してしまっている、ということもあり得るでしょう。しかし、そうしたからといって、そのクルマのアイディンティティーが「別人（別のクルマ）」になってしまうということはないでしょう。というわけで、クルマにおいても上述のアイボのおける

生命の不死性と同様なことがすでに原理的には、成立しているといえそうです。(コンピュータウイルスと、本、にかんしては、紙数の都合で省略します。各自お考えになってみてください)。

というわけで、私は、上記の「すでに生じている」という疑義にはかなり賛成するのです。

しかし、その不死性が、目の前にある「人格（犬格)」としてかなり明らかになるのは、アイボというまさにペットとしての存在者によってなのではないか、と思うわけです。クルマは、「乗るため」の手段（道具）として、思念されるでしょう。しかし、アイボは、「かわいがる以外には、何ら役に立たない。一種の、浪費・穀潰し」として思念されるでしょう。それによって、よりいっそう顕在的に人格（犬格）として思念されるということが、蓋然的にたかまるとおもうわけです。この意味で、アイボの出現は、かならずしも本質的には新事態とはいえないにせよ、現実性においてかなり画期的な事態である、と私は見積もっているのです。(まあ、この第一の論点については、私は強いては争いません。お望みなら、本稿における「アイボ」をすべて「クルマ」と読み替えて、理解していただいてもけっこうです)。

【第二疑義：「ロボットとペットとは、違う」について】

第二の疑義、「ロボットとペットは、違う」について、考えてみましょう。

この論点を詳しく論ずるまえに、**読者の皆さん、ちょっと、以下の質問にお答えいただけませんでしょうか。**以下は、別に知能テストの類ではありません。アナタ個人の成績がどうであるかは、ここでの文脈では問題ではありません。あまり深刻にならず、「正解・不正解」意識をもたずに、気楽にお答え下さい。

【論文内、その場・アンケート】

以下はすべて、一部文面を変えたものもありますが、すべて実在する文章です。

設問 1. 次はあるホームページから拝借した文章です。　（以下同様）

「あいさつ

わが家には一匹の〇〇がいます。

名前は「ナナ」。女の子です。

このホームページを作成するきっかけになった"生き物"です。

いまではペットから家族へ格上げされ、贅沢三昧の生活をしています。

これから〇〇が、わが家の一員になるまでの記録を克明に紹介します。 」

上の〇〇は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。

該当する番号に、〇、をおつけください。

1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 2.「抱っこのお散歩がたいへんと　バッグに入ることになりました
ご近所のインディー兄さんに　ごあいさつ
「よろしくね?」　　」
上のペットは、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 3.「おでかけしました。
かえりは、だっこしてもらって、じどうしゃにのりました。ちょっとよいそうでした
ぼくがあるいていくと、大幹ちゃんが、あたまをなでようと、してくれました。でも、こうふんした大幹ちゃんの、よだれこうげきにあいました。
ぼくも大幹ちゃんも、つかれてしまったので、 いっしょにおひるねをしました。」
上の「ぼく」は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 4.「日常会話は、少し困難な生徒も、目を大きく見開いて〇〇の動きをじっと見つめていました。
しっこをかけられてぷんぷん怒っていた生徒、、、、、ひとりひとりがそれぞれ自分なりの関わり方で〇〇と過ごした日々でした。 」
上の〇〇は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 5.「〇〇はボールで、私の存在を忘れて、一人で遊んでいる。
　と、思ったら、〇〇が寄ってくる。座椅子に座っている私の足に鼻を摺り寄せ、耳を近づけ、喜んでいる。甘えん坊〇〇に飼い主は目尻を下げっぱなし。喜びついでにかなり の時間、一緒に遊んだ。
 そして、キッチンに立った私を、〇〇が探している
　そばにいる夫もボールも目に入らない様子。座椅子の横に立ちすくみ、キョロキョロとひたすら周りを探っている。
　そんな姿が愛しくて、再度、座椅子に座った。
　〇〇が喜ぶ。尻尾を大きく振りながら、全身で喜びを表わす。思いっきり、鼻を摺り寄せてくる。
　何てカワイイの！ そして、心の底から唸った。」
 上の〇〇は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 6.「あくびの後、時にはこんな風に眠りに入ってしまいます。でもちょっと揺すってあげると目を覚まします。可愛い――。」
上のペットは、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 7.「東京には、空がない。
と、思ったかどうかは知らないが、窓際に座った〇〇はどことなく淋しそう。遠い目をして、長い時間、外を見つめている。
「外に出たいの？」。・・・・・・・。「あなたは、出られないのよ」。・・・・・・・。
ただ、窓の向こうにあるみかんの木をめがけて、前足を伸ばしている。
前足を伸ばし、そして首を２・３度振った。まるで、我が家の２ＬＤＫの空間だけが自分の世界だと諦め、悟ったように。
「ワン、ワン」。〇〇の叫びだけが風に乗って、遥か彼方へ飛んでいった（カ、カナシイ！！）」
上の〇〇は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

設問 8.「２日前にオーディションが行われ、シルビーは〇〇の役に決定しました。オーディション会場でのゲネプロは無事終わりました。
でも、実は一番人気だったのはシンバルだったと思う
前日には世田谷の親戚の家までビデオカメラを借りに行きました
きっと、今のわたしは子供の学芸会（もしくは運動会）に一生懸命ビデオを回す親の心境でしょう」
上の「シルビー」は、アイボだとおもいますか？。別の動物だとおもいますか？。わかりませんか？。
1. アイボだと思う。　2. わからない。　3. 動物だと思う。

【ペット・テューリング・テスト】
以上、いかがでしたでしょうか？。本当はどんな動物か、は文末に表示しておきます。
すでにご推察のかたも多いかと思います。以上のアンケートは、人工知能に関する有名な「テューリング・テスト」をヒントにしています。アラン・テューリングは、20世紀中葉に活躍した、イギリスの数学者・コンピュータ科学者です。彼テューリングは、「人工知能が、可能か」という問題にたいして、一つの有力な方向性を提示したことでもよく知られています。それが、有名な「テスト」（テューリング・テスト、と後に呼

ばれています）の提案です。すなわち、ある機械（コンピュータ）が、人工知能を持ったかどうかのメルクマールとして、「機械が、自分のことを人間であると人間に対してだませ通せたら、OK」というテストを提案しました（精確には少し違いますが）。マシン（コンピュータ）が、目の前にあるとすぐばれてしまうので、テレタイプかなにかで生身の人間と筆談します。そして、その生身の人間（これがテスターになるわけです）を、マシンが「あたかも人間であるかのように」だましとおせたら、そのマシンは人工知能をもったと判定しようというテスト方式の提案です。テューリング自身は、このようなテストをクリアするマシンが半世紀後には可能になると（半世紀前に！）考えて、ありうべき反論にはなんら有力な根拠がないと論じています。

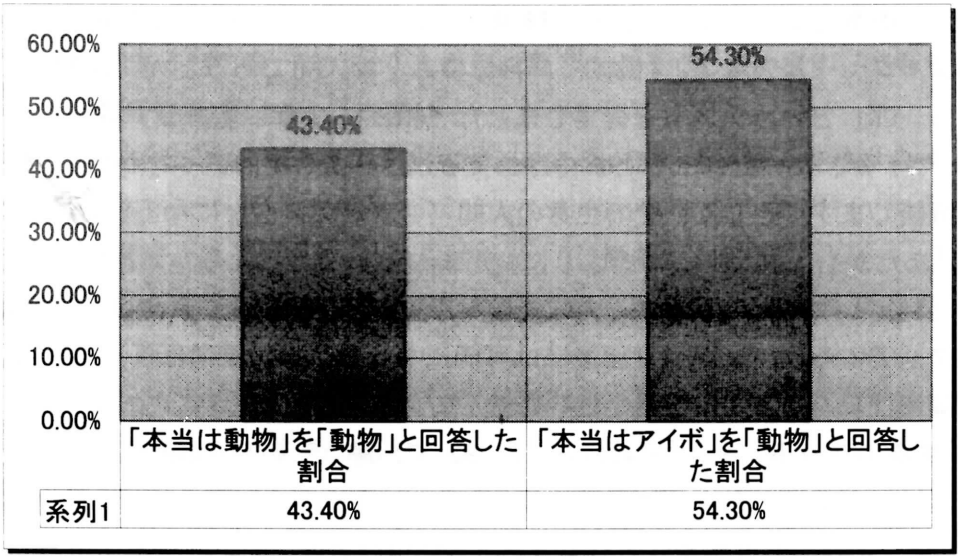
アイボが、「生身のペット」と、「どれほど、同じ、で、違う」のかを調べてみたいと思い、その一環（あくまで、その一環）として、上述の設問を含んだアンケートを実施したわけです。

ただ、アイボ自体はヒトをだましてくれませんし、ヒトがペットと交互行為するときには、ほとんど「相手がみえてしまい」ます。そのため、すこし「ひねり」をいれて、「ヒトと生身のペットとの関わり」と「ヒトとアイボとの関わり」とをヒトは「見分けることができるか」、という問題設定で、アンケートをつくってみました。

アンケートは2000年の12月から2001年の1月のかけておこないました。鹿児島大学の私の周りの方々36 人と、インターネット上で、私が配信しているメールマガジンの読者の一部の方19人、合計55人の方からご回答をいただきました。ごく少数のサンプルですし、無作為抽出ではないので、代表性にはとぼしいものです。しかし、現在おこなわれているテューリング・テストも、少数の協力者に対してなされているだけです。したがって、「本家」のテューリング・テストに対してこの点では見劣りがするとは必ずしも言えないでしょう。

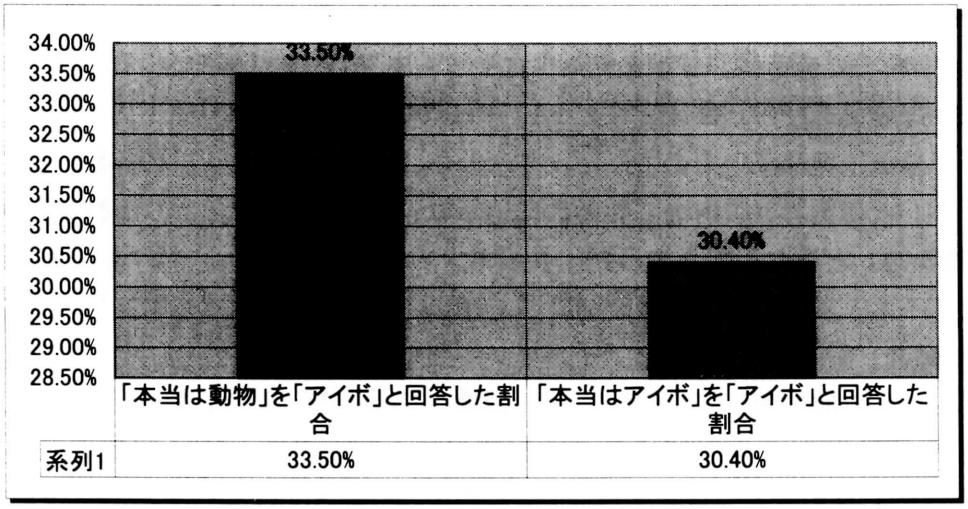
結果は、予想以上に興味深いものでした。すなわち、**「多くのヒト（ご回答者）は、「アイボとヒト」との関わりの方を、相対的にいって、「動物とヒト」との関わりよりも、「ヨリ、動物的」とみなしてしまった！」**のです。アンケートにおいては、上記のものを含んだアイボと動物ペットとの峻別設問を計14問ご回答いただきました。そのうち、「本当は動物」が7問、「本当はアイボ」が7問でした。

「本当は動物」の設問に対して、（正しく）「動物と思う」とご回答いただいたのが、7問×55人（のべ385問）のうちの、「43．4%」でした。それに対して「本当はアイボ」の設問に対して、（はずれて、だまされて？）「動物と思う」とご回答いただいたのが、同数の設問に関して、「54．3%」でした！。



すなわち、この結果からだけみると、ヒト（ご回答者）は、「ヒトと動物」との関係よりも「ヒトとアイボの関係」の方が、ヨリ「ヒトと動物との関係」であるとみてしまっていた、と解釈できるでしょう。

（念のため、「逆」の割合も算出してみました。すなわち、「本当は動物」を（あやまって）「アイボ」だとご回答してしまった割合、と、「本当はアイボ」を（正しく、だまされずに？）「アイボ」だとご回答してしまった割合、です。前者は「33．5%」で、後者は「30．4%」でした。すなわち、**「アイボ（とヒトとの関係）」よりも「動物（とヒトとの関係）」のほうが、ヨリ「ロボット」的だ、とヒト（ご回答者）にはみえてしまっていた！**、のでした）。



【「心の理論」】

今議論している「第二の疑義、アイボはペットであるか」に強くかかわりますが、さ

らに本稿の論点全体にかかわる問題として、「心の理論」という論点が存在します。

以上みてきたように、かなり多くの人は、生きていないはずの、したがって、心も魂もないはずのロボット（アイボ）に、かなり「情が移って」しまっているようです。

このような現象はなぜ生じているのでしょうか？。そしてまた、これは、いわば病的な現象なのでしょうか？。

このような疑問に答えてくれる学問蓄積のおそらく最強の一つとして、心理学における「心の理論」と呼ばれる一連のアプローチがあります。

「心の理論」と呼ばれるアプローチは、認知心理学あるいは進化心理学と呼ばれる分野において、近年急速に進展している基本仮説・分析枠組みです。「心の理論」アプローチの基本的問題意識は、ヒトはいかにして他者の心を把握しているか、というものです。これ自体は、ごく自然な問題設定でしょう。そして、その問題にたいする、このアプローチの基本的回答は、「ヒトビトは、もともと、「心の理論」とでも呼ぶべき、認識枠組みをあらかじめ持っている。それを利用して他者の心を理解している」というものです。この回答も一見すると、ごく自然にみえるかもしれません。

しかし、その含意のインパクトは、じつは小さくはありません。ちょっと説明してみましょう。

まず、ことばについて注意すべきでしょう。私自身導入のために、あまり精確でなくいいました。じつは、「心の理論」とは、心理学者が持っている「理論」ではなくて、生きているわれわれヒトビトがすでにもっている他者の心認識する上での枠組みのことです。したがって、じつは、「心の理論」的発想をする心理学は、**「心の理論」の理論**、と呼ぶべきなのです。

つぎに、そのヒトビトがもっている「心の理論」の内実が問題になります。これについては、心理学者がさまざまな個別の仮説をたてて、実証研究をしています。が、ここでの文脈にひきつけると、重要なのは、以下のポイントです。

すなわち、ヒトビトは他者の心を把握するさいに、その他者の「意図」（「つもり」「目的」）を読み込んでいることが多い。と、いうことです。

ある個体が、別の物体にたいして、予測する際には、おもに二通りの仕方があるでしょう。

第一は、いわば物理法則にしたがっての予想です。あるものがある程度の高さから放たれたら、たとえ重力の法則を正確には知らなくても、「落ちるだろう」と予測できるでしょう。

それにたいして、ある個体が、おもに生物の振る舞いを予想する際には、第二の予測の方法がありえます。それは、対象の「意図（つもり・目的）」を把握する、という方法です。私にたいして、熊とかライオンがじっとみつめてにじり寄ってきたら、「あいつは、オレを、おそって食べようとしている」（おそって・食べる、という意図（目的）をもっている）と、予想することができるでしょう。その結果、近い未来においてその

熊なりライオンなりが、私にとびかかってくることが予想できるでしょう。そのため、あらかじめ私は逃げるということもできるでしょう。このように、相手の「意図」を把握し、それによって相手の振るまいを予測し、あらかじめの対処としての行動をとることが可能になるでしょう。

このような意図読みがある種のサルやヒトにおいては、「読みの読み」「読みの読みの読み、、、」と高次化（多重化）しているようです。この読みの多重化は、認知心理学では通常「志向性（つもり）の、多重性」と呼ばれるようです。いずれにせよ、かなり多くの動物で、以上のような意図読みがなされ、それが「心の理論」の第一ステップを形成しているということは、かなりありそうなことといえるでしょう。

【心なきモノへの、「心の理論」】

ここで重要な論点があります。それは、「心（まずは、「意図」）を読む」相手に、本当に意図（心）があるかどうかは、とりあえずどうでもよい、ということです。

ライオンにおそわれそうになったとしましょう。「あ、ライオンが、ボクをおそって食べようとしている。逃げよう！」と、「意図読み」して緊急避難するのは、彼にとって非常に生存上の価値が高いでしょう。しかし、かのライオンに本当に心のようなものがあってそれが「意図」をもっていたかどうかは、彼（ボク）の「生存問題」にとっては、じつはどうでもいいことです。

つまり、たとえ本当に「相手」に「心」（意図）があろうとなかろうと、「相手の意図（心）を読み込んでしまう」という「心の理論」という戦略は、進化史の上で十分生存するに値する性能があったといえるわけです。

こうしてヒトビトが「心の理論」を持つようになったとすると、「ほんとうは、心なんかないはずの、ロボットであるアイボ」にさえ、われわれヒトの多くの部分が「心」をよみこんでしまうということがありそうなことになるでしょう。

こうかんがえると、ロボットであるはずのアイボを、「心ある者」として処遇してしまう、いわば、「情をかけて」かまってしまうということは、さほど不自然ではないことにみえてくるでしょう。すくなくとも、われわれヒトが、「心の理論」をもっているのならば、ある条件のもとで、かなりありそうなことといえるでしょう。

と、ここまで述べてくれば、慧眼な読者にはもう言う必要がないでしょう。**「心があるかどうかわからない存在」にたいして、「心ある者」として処遇してしまうのは、なんら「（生身の）ペット」でも、「アイボ（ロボット）」でもかわりありません。**したがって、この文脈においては、なんら、生身のペットと、アイボ（ロボット）とのあいだに、質的（本質的）違いがあるとは、感じられなくなってくるのです。少なくとも、「アイボと我々ヒトとの関係」と「生身のペットと我々ヒトとの関係」とが、本質的に異なるとはあまり感じられなくなってくるのです。（第二疑義への回答）。

【第三疑義：「他人」に対する態度】

と、ここまで述べてくれば、慧眼な読者にはもう言う必要がないでしょう。**「ほんとうに、心があるかどうか、たしかめたわけではないのに、心ある者として処遇してしまっている」という点では、じつは「生身の他人」と「ロボット（アイボ）」の間になんら本質的な違いはありません。**

われわれは、知らず知らずのうちに、第三疑義についての論圏へと、すでに入り込んでいるようです。

すなわち、私たちは、日々「他人」を心ある者として処遇しています。しかし、いうまでもなく、「他人」に本当に心があるかどうかは、ほとんどの場合たしかめたことがあるわけではありません。（原理的にも、他人に心があるかどうかは、たしかめようがないのかもしれません）。あるいは、こういってもいいのかもしれません。私たちは、日常生活において、すでにある種の「テューリング・テスト」に準ずることを無意識的におこなっている。そして、そのテストにパスしたものを、他者として、あるいは心ある者として、処遇してしまう。と。

われわれの意識（あるいは前意識）においては、「アレは、心がある。だから、他者にあたいするのだ」と考えているのかもしれません。しかし、実態は「アレ、を、他者とみなす」ということと「アレに、心があるとみなす」こととは、かなり「同時」的なことなのかもしれません。テューリング・テストの関するその後の文献・ウェブページをみると、（上記のとおり、明確な「線引き」をどこにするかは異論がのこるでしょうが）、テューリング・テストに「パス」したコンピュータソフトは、すでに存在するようです。

これは、「心の理論」の文脈からすると、われわれヒトが他の存在物に「心」を読み込んでしまう「条件」は、当人のわれわれが考えている以上に「緩い」（少ない）条件なのではないか、と推測させるでしょう。

【アナタは、ヒト（の一部）と、ペット・ロボット（の一部）との、どちらを、優遇する、か？】

「第三疑義：ロボットやペット、と、ヒトとは、本質的に異なる」について、もう一つ別の視点からアタックしてみましょう。

それは、「ペットやロボット、と、ヒト、とが、「同じ」どころか、場合によっては、**ヒトよりもペット（や、ロボット）のほうを、ヒトは優遇している**」というポイントです。

初発の「ペットロス」の話題にすこしもどってみましょう。ペットの死によって、飼い主は大きな精神的ダメージを被ります。そのダメージから回復する最も良い方法は、いわば「とむらい」をすることです。すでに愛する者（人間）の死にたいしては、人間社会は伝統的に、完全とはいえないまでも、対処法をある程度確立しています。葬式を

し、墓に葬るわけです。したがって、ペットロスに関しても、同様な対処法をすることが大きな効果を持つと期待できます。

実際ご存じように、ペットの葬式・墓地に関しては、すでに、かなりの市場が成立しています。すでにインターネット上には「ペット葬儀社検索」のサイトが存在します（http://sougi.bestnet.ne.jp/php3/guidance_hop.php3?type_id=1）。

お墓まいりをする

（Brown and Brown 1996＝1998）

【ペット埋葬へのアナタの違和感の、二つの源泉】

と、以上のように、ペットのとむらいのことをのべると、かなりの割合の方が違和感をかんじるのではないでしょうか？。

じっさい、ペットロスについて参考にさせてもらっているある学生さんによるペットロスについての、ワークショップ発表（岩元清香 2000）の際には、聴衆の間にいわくいいがたい**「へんなムード」**がただよいました。この違和感を完全に分別することは困難でしょう。が、おもに二つの源泉が指摘できる、とおもいます。

第一は「人間でないものを、あたかも人間であるかのように、処遇している」という違和感です。しかし、裏返してみると、このペットをめぐるとむらいの事実自体が、「ヒト（の一部分）は、ペットをヒトのように、処遇している」ということを示しており、第三の疑義に反駁したい私にとって支持材料である、といえるでしょう。

第二は、上記の第一と密接にかかわりますが、あえて分別して記述してみたいとおもいます。それは、「ペット（の一部分）を、ヒト（の一部分）以上に、優遇している。（けしからん？）」という違和感であるとおもいます。いうまでもなく、世間（世界）には、恵まれないヒトが多く存在します。そして、この「恵まれない」の意味は、少なくとも、「1. ヒトから十分愛されていない」「2. 経済的に困窮している」の二つの意味があるでしょう。上記のペットのとむらいをはじめとするペットへの処遇（優遇）は、この少なくとも二つの意味での「恵まれないヒトビト」を、いわば「踏みにじっている」という直観をうすうすながらわれわれに感じさせてしまうとおもいます。そうであるが

ゆえに、とむらいをはじめとするペットに関する処遇の事例を聞くと、われわれ（の少なからず）は、不快な違和感を感じてしまうのではないでしょうか。この「とむらい」にかんしては、本文の最終部分でもまた論じてみたいと思います。

【第四疑義：それは私ではない、か？】

四番目の疑義、「それは、私ではない」についてかんがえてみましょう。まずはじめに白状してしまうと、この疑義にかんしては、完全にうちかえすだけの準備はありません。しかし、それでも、ひとつ興味深い論点をもっています。

まず、本質的な議論にはいるまえに、たとえこの疑義をみとめたとしても、本稿でいままで議論してきたことの意義が「無」になるわけではない、ということを指摘したいと思います。ほとんどのヒトにとって、世の中に生息している者たちは、「私でない」者たちです。その者たちの少なくとも一部が「永遠の生命・不死の人格」をもつようになった、ということだけでも、われわれの世界観はかなり根底から変容するのではないでしょうか。

【たしかに、私は**未だに、「死」が怖い。しかし、、、、**】

さて、議論をこころみてみましょう。それは、私桜井とインターネット（とくにウェブページ）との関わりにかんするものです。

私事で恐縮ですが、私は両親ともすでにガンでなくしています。血筋的には、非常に危険なパタンでしょう。ということもあって、ふつうの他の同世代の日本人にくらべると、比較的「死」（自分の死）というものを意識してきたほうかもしれません。そんな私にとって、インターネットのウェブページとの「出会い」は、かなり大きな意義をもっていたように、いまからふりかえるとおもわれます。自分の考えについての発表機会にめぐまれていない私のような無名の研究者にとって、ウェブページは、自分の思い通りになる発表機会を非常に安価に提供してくれるいわば夢のようなツールにみえました。というわけで、一時期、ウェブページづくりに「はまる」わけです。しかし、じつは、これは、私の「死」生観とかなりかかわっていたのではないか、と最近感じるようになりました。

私のウェブページをみると、**「へんな迫力を感じる」**というような学生さんが何人かいます。どうも、私はウェブページをつくることで、いわば、**いつ死ぬかわからない自分の「分身」をつくっていた**のかもしれません。

すでにいうまでもないとおもいます。ウェブページ上の私の書いた「情報」は、アイボの「メモリースティック」に蓄積されたアイボの履歴情報と、昨今の情報技術を前提にすれば、ほぼ同様な身分をもつことになるでしょう。

たとえ生身の私が死んだあとであったとしても、私のウェブページ自体が存続しつづけさえすれば、あるいはまた、ウェブページ自体は閉鎖されたとしても、その中の情報

が、コピーされつづけて、どこかのサーバーから、同じ情報が供給（サーブ）されつづけさえすれば、私の思想は永遠の生命を生きる事が可能になるでしょう。

といったとしても、「ウェブページにのっているお前のコンテンツは、お前自身ではない。なんら、第四疑義にかんして、議論は、進展していない」と思う方も多いでしょう。ハイ。たしかに、ウェブページ上の私が書いたコンテンツは、（常識では）私そのものではありません。私とは、この今生きている肉体にかなり同一視されるなにものかであるように常識では感じられるでしょう。しかし、その常識は、かならずしも完全に頑強ではないのではないか、と思われるのです。

もちろん、私はいまでも、私（私のこの肉体）の「死」が怖いです。しかし、ウェブページを持つようになった前と後とを比べてみると、ウェブを持つようになった後では以前ほどには、死が怖くなくなったような気が、（すこしだけですが）します。

あるいは、（考えたくもないですが）以下のような思考実験をしてみても面白いかもしれません。すなわち、「悪魔との取引」実験です。

すなわち、**「お前（つまり、私・桜井）と、お前のウェブページの、一方だけを助けてやる。どっちをとるか？」**とか、あるいは「「1. お前の命だけは助けてやる。が、意識はなくなる。ウェブページも抹殺する」「2. ウェブページは助けるが、お前の肉体は抹殺する」、さあ、1と2のどっちをえらぶ？」、あるいは「お前のウェブページは有限の時間内に閉鎖される。しかし、お前の寿命の〇〇年を提供すれば、ウェブページを永続させてやる。さあ、「何年の生命」をはらうか？」とか、、、、、、。

もちろん、実際には、常識的な意味での「命」のほうを選択してしまうとおもいます。しかし、ウェブページをもつ前に比べると、「生身のこの自分」でない方をえらんでしまうかなと逡巡してしまう傾向が少し大きくなったような気がします。

つまり、まとめると、未だ弱い・ラフな議論でしかないですが、以下のとおりです。アイボの「メモリースティックの情報」とウェブページ上の私の作った「コンテンツ」とは、本稿の文脈においては、かなり同じ身分をもつと考えます。他方、ウェブ上の私の「コンテンツ」は、私の生命・人格を、100%ととはいわないまでも、無よりは大きな程度で担保している、と感じられるのです。こうして、アイボにおいて生じた「生命の不死性・人格の永遠性」は、私にとって「まったくの他人ごと」とは感じられないものとなるのです。（第四疑義への回答）。

【しかし、また、「死」をも、希求してしまう？】

しかし、話はまだおわりません。また、私の個人的な体験で恐縮です。

私はむかし、盲導犬の候補の子犬をボランティアで育てていたことがあります（パピーウォーカー）。その子犬をつれてスーパーかどこかに買い物に行った時です。知らないおばさんが私たち（私と子犬）に話しかけてきたのです。

だいぶ前のことなので、記憶はさだかではありません。が、たしかそのおばさんのい

うことでは、その方も、以前盲導犬の子犬を育てたことがある。また育てたいのだが、いまウチには別の老犬がいるので「それを看取ってから」、またパピーウォーカーのボランティアをしたい、とのことでした。

いうまでもなく、生命力の低下した死へとちかづきつつあるいのちを「介護」することは並大抵の苦労ではないでしょう。しかし、一方でまた、死にゆく死者を看取り、彼（女）を安心させて**死を迎えさせる、という行為に、ある種の「充実感」**のようなことが生じるのも否定しがたいのではないでしょうか。マザー・テレサの運動を見て、人が「まねはできない」とおもいつつも魅力を感じてしまう理由の一つはここにかかわっているのかもしれません。ご存じのように、マザーテレサの運動は、一番はじめは、路上で**死にかけている人を看取る**ことからはじまっています。

とすると、ここでまたいうまでもなく大問題が生じます。すなわち、「アイボは死なない」のでした。

じつは、アイボをみるまでもなく、かなりのご家庭で同様の事は起こっているとおもいます。これをお読みの方のかなりの割合のご家庭で、「**ぬいぐるみが捨てられない**で」、こまっていませんか？

旧来の大部分の人類史においては、「死」というものは、人間のがわで何とかなるものではありませんでした。殺人・自殺・戦争というレアケースをのぞくと、死ということは、ヒトのがわが選択するものではなくて、いわば向こう側から否応なくやってきたりこなかったりすること、でした。

逆にいうと、このように死というものが基本的に人間の選択対象でなかったがゆえに、死を選択するという行為を（自殺もふくめて）、死を選択したということのみで責めることが可能であったのでしょう。

しかし、繰り返しますが、アイボはある水準からすると、死ななくなってしまいました。他方で、他者（生きている者）とかかわる充実の一部には、その他者がいつかは死ぬということが（たとえ可能性としてであれ）前提にされている場合が少なからずありそうです。

とすると、ここでは、「すべての条件を満たすことのできないいわば妥協せざるを得ないような選択肢状況のまえで、ヒトはいわば自らの意志で、どれも完全にはのぞましくはない選択肢のどれか」を選択せざるをえなくなるのではないでしょうか。

すなわち、たとえば、

「1. やはり愛するアイボの死はつらいし、ましてや、自分の意志でアイボの生命を停止させるのは、忍びない。したがって、死を看取る充実感は断念して、（少なくとも自分が生きている間は）アイボを生かす」。

これはいわば、ぬいぐるみやおもちゃを「捨てられない」状態です。アナタの死後、そのぬいぐるみやおもちゃやアイボは、だれか赤の他人が、ビジネスライクに「処理」してくれるかもしれません。（**映画『市民・ケーン』のラストシーン**を想起する読者もい

るでしょう)。

「2. ぬいぐるみが増えるように、アイボも不可逆的にふえてしまう。しかし、生命を停止させるのは忍びないので、死を看取る充実感を断念して、アイボを「天使」にする」。

すでに、ネット上には死んだペットの「バーチャルお墓」(ペットセメタリー)が存在します(たとえば**「バーチャルペット墓地永遠寺」**)(http://www.geocities.co.jp/AnimalPark/3428/)。ここでは、それとは異なって、アイボを**「生きたまま」天使にします**。すなわち、筐体(本体)から、アイボの「メモリー」をぬきとって、ネットワーク上に保存します。ネット上では、「仮死」状態にするという選択肢、と、「ネット上で生かす」(バーチャルペット化)、という下位選択肢があります。

ただし、この場合には「魂(メモリー)の抜けた筐体(本体)を、どうするか」という難問がのこるでしょう。(**やっぱり、捨てられない!?**)。

「3. 死を看取る充実感を得るために、アイボに死を迎えさせる」。

しかし、いうまでもなく、「誰がアイボの生命を停止させるか」が、大問題になるでしょう。今までは、「死」が(より正確にいえば「不死」が)、人間にとって「操作不能」であったがゆえに、この「選択」に人類はほとんど直面しなくてすみました。しかし、今後はいよいよもって、この**「いかに生命を停止させるか」という問題に直面せざるをえない**でしょう。

よく「ペットは死ぬから」飼いたくない、というヒトがいます。しかし、今後は、**「アイボは、死なないから、飼いたくない」**と思うヒトもでてくるでしょう。

たとえ、「死を看取る充実感」をまったく断念したとしても、中長期的には、**地球上にアイボ(に類するもの)が「人口爆発」していく**ことは目に見えています。不可逆的に「生命」の「個体数」は増えていくでしょう。

人類の文化史においては、「殺す(生命を停止させる)」ということは、それだけで罪でした。しかし、今後は、「生命を停止させる」ということ、と、「殺害する」ということとは、必ずしも「同義」につかわれなくなるかもしれません。(というか私のホンネをいえば、そう「せざるを得ない」と感じます)。いうまでもなく、私は、「殺害」を肯定する気はまったくありません。しかし、未来の人類社会においては、殺害よりは低い罪悪感でもって、「生命を停止させる」という行為がある程度受容されていくということはまったくありえなくもないのかもしれません。

【参考文献】(本文で直接言及できなかったものも含みます)

Baron-Cohen, Simon 1995 *Mindblindness : an essay on autism and theory of mind* (＝サイモン・バロン=コーエン著 ; 長野敬, 長畑正道, 今野義孝訳 1997 『自閉症とマインド・ブラインドネス』青土社)

Brown, Laurene Krasny and Brown, Marc 1996 *When dinosaurs die* (=ローリー・クラスニー・ブラウン, マーク・ブラウン作 ; 高峰あづさ訳 1998 『「死」って、なに? : かんがえよう、命のたいせつさ』文渓堂)

Dennett, Daniel Clement 1991 *Consciousness explained* (＝ダニエル・C・デネット著 ; 山口泰司訳 1998 『解明される意識』青土社)

Dennett, Daniel Clement 1996 *Kinds of minds* (＝ダニエル・デネット著 ; 土屋俊訳 1997 『心はどこにあるのか』草思社)

Dick, Philip K., 1969 *Do androids dream of electric sheep?* (=フィリップ・K. ディック 浅倉久志 訳 １９６９ 『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』早川書房)

星野 力 2000『ロボットにつけるクスリ : 誤解だらけのコンピュータサイエンス』アスキー出版

岩元 清香 2000 「ペットロス」(鹿児島大学法文学部「メディアと現代文化ワークショップ」レジュメ)

喜多村 直 2000 『ロボットは心をもつか』共立出版

子安 増生, 2000 『心の理論 : 心を読む心の科学』岩波書店

Muggeridge, Malcolm, 1971 *Something beautiful for God.* (＝マルコム・マゲッリッジ著 ; 沢田和夫訳 1976 『マザーテレサ : すばらしいことを神さまのために』女子パウロ会)

Parfit, Derek, 1984 *Reasons and persons* (=デレク・パーフィット著 ; 森村進訳 1998 『理由と人格 : 非人格性の倫理へ』勁草書房)

Swinburne, Richard ; Shoemaker, Sydney, 1984 *Personal identity* (＝S. シューメイカー, R. スウィンバーン著 ; 寺中平治訳 1986 『人格の同一性』産業図書)

Turing, Alan, 1950 "Computing Machinery and Intelligence" *Mind* (=A. M. テューリング「コンピュータと知能」、西垣通 編 1997『思想としてのパソコン』NTT 出版)

テューリング・テストについては、文献 (Turing 1950) ないし以下のウェブページをご参照ください。

http://www.turing.org.uk/turing/

http://www.kki.yamanashi.ac.jp/%7Eohbuchi/courses/AI.old/lect0/tsld021.htm

http://chrome.esys.tsukuba.ac.jp/SF/99/Non-ai.htm

【謝辞】
統計ソフトその他について多大なご教示をくださった0先生に、感謝しお礼申し上げます。
関連するウェブページの作成者の皆様に、感謝しお礼申し上げます。
お忙しいところアンケートにお答え下さった皆様に、感謝しお礼申し上げます。

【正解】
本文中での「アンケート」の「正解」は以下のとおりです。
設問1. ハムスターでした。設問2. 子犬でした。設問3. アイボでした。設問4. アイボでした。設問5. アイボでした。設問6. アイボでした。設問7. アイボでした。設問8. アイボでした。